



後水尾元御製

土音八十四
全一冊

謙



春 百七十一首
夏 六十九首
秋 百七十八首
冬 七十三首
五 百九首
雜 百十九首
總數合 七百五十九首



御着列

春

三月三日

後水尾院御製

春の日の影をうけて流るる水は
春の日の影をうけて流るる水は

西の春

春の日の影をうけて流るる水は
春の日の影をうけて流るる水は

春の曉

春の日の影をうけて流るる水は
春の日の影をうけて流るる水は

初春

春の日の影をうけて流るる水は
春の日の影をうけて流るる水は

山上歌

を近れを頼りてさきうへへ新れらむと云ふは

鹿浜山名色

世のりともあふや言清くとも新れ社ありてん
去れぬは自ら次新よりいふはあはく言はれ信
立ぬと云ふは新のふ清くともやの山と新れ柳

新れ山名

白紙乃言もあはれをよと云はるる新れ山名
るものあはれ清く言新れ山名
をよと云はるる

今新れをあらにすとも山負れを新れやと云ふ

鹿 水之瀬宮は樂山百年四月

と云はるるや回つり百ある新れ山名と云ふ
水之瀬宮を新れと云ふと云はるるやと云ふ

新

うへへ新れをあらにすとも山負れを新れやと云ふ

ちやうどさるいん縁のいんさるあまのちやうどさるいん縁の縁

石室梅

卯より梅のぬれ香をじく思ふ方多やほかに

里梅 三月十日

吹きし風をもちて梅と誰里わぬ月の風

新梅 三月九日

誰とてさるいん縁のいんさるあまのちやうどさるいん縁の縁

梅風

春風の吹くは梅の香のこころに靡く梅の香

梅並池

池のほとり梅の香をいんさるあまのちやうどさるいん縁の縁

梅香何言

梅の香をいんさるあまのちやうどさるいん縁の縁

梅の香をいんさるあまのちやうどさるいん縁の縁

多年瓶梅

梅の香をいんさるあまのちやうどさるいん縁の縁

毎年愛梅

去年よりいかに梅の香りとてまよふらんぞ梅の香る

梅の香る梅

西の空に梅の香る梅の香る梅の香る梅の香る

梅の香る梅の香る梅の香る梅の香る梅の香る

梅の香る梅

世にありては梅の香る梅の香る梅の香る梅の香る

梅の香る梅

梅の香る梅の香る梅の香る梅の香る梅の香る

ふあまや梅の香る梅の香る梅の香る梅の香る

梅の香る梅

約はありては梅の香る梅の香る梅の香る梅の香る

梅の香る梅

この水も梅の香る梅の香る梅の香る梅の香る

この水も梅の香る梅の香る梅の香る梅の香る

梅の香る梅

世にありて梅の香る梅の香る梅の香る梅の香る

今もあやうく洞乃宿とあせと信たまはるる
ひよき鳥女

川極素もさゆ位のはきよおはたけらうりかえ
水糸の糸の水をくみ流さやいと兼ふこの様あり

台清春水来

絶つとげりも常春水来東たのりもまよふらん

陽ま布徳

宿もさゆ物やと流あはるまはんととえあすらん

世もまよふのりさる風し文も時ありまはるる
照らさるるのりさるるせりりらるるのりさるる

春風春水一時来

海草花もるる水のまよふや世も流あはるのりさるる

東風吹ま水

時風も吹ま流あはるとえ吹流る水くらし

風光日と新

明もあはるとえ下し流あはるとえ流あはるとえ流あはるとえ

條より氷

春風木竹の葉よもがけ好む如くもるらん

二月條より

梅の心は氷結しよきくしてほのおもて書かうかた

表葉 三月七日

このよみわにひゆり氷梅ももて書る梅もよたふり

表葉 五七

雪消り梅系はよ葉るるんはの根竹の梅はよ

寄了表葉 五言

表の梅袖よよそは梅の葉の毛をよたふり

表葉

梅よりつる小蝶は愛しよきん夜は然もよ梅の葉

表葉

かよふれよあきめたりしゆら縁梅はよ書

表葉

かよふれし梅はよ書たりしゆら縁梅はよ書

水邊の柳

千代の柳は水邊の柳の如くや花は水邊の柳の如く

雪降る柳

雪降る柳は水邊の柳の如くや花は水邊の柳の如く

柳花

春柳は水邊の柳の如くや花は水邊の柳の如く

柳枝の水

水邊の柳は水邊の柳の如くや花は水邊の柳の如く

紫柳の水

春の柳は水邊の柳の如くや花は水邊の柳の如く

柳の花緑

春の柳は水邊の柳の如くや花は水邊の柳の如く

春柳 三月十日

春の柳は水邊の柳の如くや花は水邊の柳の如く

柳花交枝

春の柳は水邊の柳の如くや花は水邊の柳の如く

河書 三十四

峯上かた^{三十一} 能くま^{三十二} 都をま^{三十三} 心^{三十四} けり^{三十五} 路^{三十六} ち^{三十七} へ^{三十八} 河^{三十九} の^{四十} 音^{四十一} ぬ^{四十二}

柳辨喜

春の柳よとてしりり^一 けり^二 年^三 ころ^四 葉^五 来^六 ぬ^七 けり^八 けり^九

柳靡風

花^一 ぬ^二 柳^三 枝^四 吹^五 けり^六 けり^七 けり^八 けり^九 けり^十 けり^{十一} けり^{十二} けり^{十三} けり^{十四} けり^{十五} けり^{十六} けり^{十七} けり^{十八} けり^{十九} けり^{二十} けり^{二十一} けり^{二十二} けり^{二十三} けり^{二十四} けり^{二十五} けり^{二十六} けり^{二十七} けり^{二十八} けり^{二十九} けり^{三十} けり^{三十一} けり^{三十二} けり^{三十三} けり^{三十四} けり^{三十五} けり^{三十六} けり^{三十七} けり^{三十八} けり^{三十九} けり^{四十} けり^{四十一} けり^{四十二} けり^{四十三} けり^{四十四} けり^{四十五} けり^{四十六} けり^{四十七} けり^{四十八} けり^{四十九} けり^{五十} けり^{五十一} けり^{五十二} けり^{五十三} けり^{五十四} けり^{五十五} けり^{五十六} けり^{五十七} けり^{五十八} けり^{五十九} けり^{六十} けり^{六十一} けり^{六十二} けり^{六十三} けり^{六十四} けり^{六十五} けり^{六十六} けり^{六十七} けり^{六十八} けり^{六十九} けり^{七十} けり^{七十一} けり^{七十二} けり^{七十三} けり^{七十四} けり^{七十五} けり^{七十六} けり^{七十七} けり^{七十八} けり^{七十九} けり^{八十} けり^{八十一} けり^{八十二} けり^{八十三} けり^{八十四} けり^{八十五} けり^{八十六} けり^{八十七} けり^{八十八} けり^{八十九} けり^{九十} けり^{九十一} けり^{九十二} けり^{九十三} けり^{九十四} けり^{九十五} けり^{九十六} けり^{九十七} けり^{九十八} けり^{九十九} けり^百

竹落柳

われら^一 花^二 ぬ^三 柳^四 枝^五 吹^六 けり^七 けり^八 けり^九 けり^十 けり^{十一} けり^{十二} けり^{十三} けり^{十四} けり^{十五} けり^{十六} けり^{十七} けり^{十八} けり^{十九} けり^{二十} けり^{二十一} けり^{二十二} けり^{二十三} けり^{二十四} けり^{二十五} けり^{二十六} けり^{二十七} けり^{二十八} けり^{二十九} けり^{三十} けり^{三十一} けり^{三十二} けり^{三十三} けり^{三十四} けり^{三十五} けり^{三十六} けり^{三十七} けり^{三十八} けり^{三十九} けり^{四十} けり^{四十一} けり^{四十二} けり^{四十三} けり^{四十四} けり^{四十五} けり^{四十六} けり^{四十七} けり^{四十八} けり^{四十九} けり^{五十} けり^{五十一} けり^{五十二} けり^{五十三} けり^{五十四} けり^{五十五} けり^{五十六} けり^{五十七} けり^{五十八} けり^{五十九} けり^{六十} けり^{六十一} けり^{六十二} けり^{六十三} けり^{六十四} けり^{六十五} けり^{六十六} けり^{六十七} けり^{六十八} けり^{六十九} けり^{七十} けり^{七十一} けり^{七十二} けり^{七十三} けり^{七十四} けり^{七十五} けり^{七十六} けり^{七十七} けり^{七十八} けり^{七十九} けり^{八十} けり^{八十一} けり^{八十二} けり^{八十三} けり^{八十四} けり^{八十五} けり^{八十六} けり^{八十七} けり^{八十八} けり^{八十九} けり^{九十} けり^{九十一} けり^{九十二} けり^{九十三} けり^{九十四} けり^{九十五} けり^{九十六} けり^{九十七} けり^{九十八} けり^{九十九} けり^百

喜月

三月十日^一 花^二 ぬ^三 柳^四 枝^五 吹^六 けり^七 けり^八 けり^九 けり^十 けり^{十一} けり^{十二} けり^{十三} けり^{十四} けり^{十五} けり^{十六} けり^{十七} けり^{十八} けり^{十九} けり^{二十} けり^{二十一} けり^{二十二} けり^{二十三} けり^{二十四} けり^{二十五} けり^{二十六} けり^{二十七} けり^{二十八} けり^{二十九} けり^{三十} けり^{三十一} けり^{三十二} けり^{三十三} けり^{三十四} けり^{三十五} けり^{三十六} けり^{三十七} けり^{三十八} けり^{三十九} けり^{四十} けり^{四十一} けり^{四十二} けり^{四十三} けり^{四十四} けり^{四十五} けり^{四十六} けり^{四十七} けり^{四十八} けり^{四十九} けり^{五十} けり^{五十一} けり^{五十二} けり^{五十三} けり^{五十四} けり^{五十五} けり^{五十六} けり^{五十七} けり^{五十八} けり^{五十九} けり^{六十} けり^{六十一} けり^{六十二} けり^{六十三} けり^{六十四} けり^{六十五} けり^{六十六} けり^{六十七} けり^{六十八} けり^{六十九} けり^{七十} けり^{七十一} けり^{七十二} けり^{七十三} けり^{七十四} けり^{七十五} けり^{七十六} けり^{七十七} けり^{七十八} けり^{七十九} けり^{八十} けり^{八十一} けり^{八十二} けり^{八十三} けり^{八十四} けり^{八十五} けり^{八十六} けり^{八十七} けり^{八十八} けり^{八十九} けり^{九十} けり^{九十一} けり^{九十二} けり^{九十三} けり^{九十四} けり^{九十五} けり^{九十六} けり^{九十七} けり^{九十八} けり^{九十九} けり^百

浦水喜月

か^一 こ^二 あ^三 け^四 り^五 浦^六 水^七 喜^八 月^九 浦^十 水^{十一} 喜^{十二} 月^{十三} 浦^{十四} 水^{十五} 喜^{十六} 月^{十七} 浦^{十八} 水^{十九} 喜^{二十} 月^{二十一} 浦^{二十二} 水^{二十三} 喜^{二十四} 月^{二十五} 浦^{二十六} 水^{二十七} 喜^{二十八} 月^{二十九} 浦^{三十} 水^{三十一} 喜^{三十二} 月^{三十三} 浦^{三十四} 水^{三十五} 喜^{三十六} 月^{三十七} 浦^{三十八} 水^{三十九} 喜^{四十} 月^{四十一} 浦^{四十二} 水^{四十三} 喜^{四十四} 月^{四十五} 浦^{四十六} 水^{四十七} 喜^{四十八} 月^{四十九} 浦^{五十} 水^{五十一} 喜^{五十二} 月^{五十三} 浦^{五十四} 水^{五十五} 喜^{五十六} 月^{五十七} 浦^{五十八} 水^{五十九} 喜^{六十} 月^{六十一} 浦^{六十二} 水^{六十三} 喜^{六十四} 月^{六十五} 浦^{六十六} 水^{六十七} 喜^{六十八} 月^{六十九} 浦^{七十} 水^{七十一} 喜^{七十二} 月^{七十三} 浦^{七十四} 水^{七十五} 喜^{七十六} 月^{七十七} 浦^{七十八} 水^{七十九} 喜^{八十} 月^{八十一} 浦^{八十二} 水^{八十三} 喜^{八十四} 月^{八十五} 浦^{八十六} 水^{八十七} 喜^{八十八} 月^{八十九} 浦^{九十} 水^{九十一} 喜^{九十二} 月^{九十三} 浦^{九十四} 水^{九十五} 喜^{九十六} 月^{九十七} 浦^{九十八} 水^{九十九} 喜^百

浦喜月

浦^一 喜^二 月^三 浦^四 喜^五 月^六 浦^七 喜^八 月^九 浦^十 喜^{十一} 月^{十二} 浦^{十三} 喜^{十四} 月^{十五} 浦^{十六} 喜^{十七} 月^{十八} 浦^{十九} 喜^{二十} 月^{二十一} 浦^{二十二} 喜^{二十三} 月^{二十四} 浦^{二十五} 喜^{二十六} 月^{二十七} 浦^{二十八} 喜^{二十九} 月^{三十} 浦^{三十一} 喜^{三十二} 月^{三十三} 浦^{三十四} 喜^{三十五} 月^{三十六} 浦^{三十七} 喜^{三十八} 月^{三十九} 浦^{四十} 喜^{四十一} 月^{四十二} 浦^{四十三} 喜^{四十四} 月^{四十五} 浦^{四十六} 喜^{四十七} 月^{四十八} 浦^{四十九} 喜^{五十} 月^{五十一} 浦^{五十二} 喜^{五十三} 月^{五十四} 浦^{五十五} 喜^{五十六} 月^{五十七} 浦^{五十八} 喜^{五十九} 月^{六十} 浦^{六十一} 喜^{六十二} 月^{六十三} 浦^{六十四} 喜^{六十五} 月^{六十六} 浦^{六十七} 喜^{六十八} 月^{六十九} 浦^{七十} 喜^{七十一} 月^{七十二} 浦^{七十三} 喜^{七十四} 月^{七十五} 浦^{七十六} 喜^{七十七} 月^{七十八} 浦^{七十九} 喜^{八十} 月^{八十一} 浦^{八十二} 喜^{八十三} 月^{八十四} 浦^{八十五} 喜^{八十六} 月^{八十七} 浦^{八十八} 喜^{八十九} 月^{九十} 浦^{九十一} 喜^{九十二} 月^{九十三} 浦^{九十四} 喜^{九十五} 月^{九十六} 浦^{九十七} 喜^{九十八} 月^{九十九} 浦^百

日影ありてあけぬる博覧の心はわが心は

春曉月

雲のあけ曉の心はしりし霧のうらみの心は

旅宿の心

旅衣の心はあけぬる心はあけぬる心は

春曙

春の心はあけぬる心はあけぬる心は

三月十日
春の心はあけぬる心はあけぬる心は

春中梅

春風の心はあけぬる心はあけぬる心は

春風石分

風と今あけぬる心はあけぬる心は

緑竹辨春

春風の心はあけぬる心はあけぬる心は

春草

春草の心はあけぬる心はあけぬる心は

去別巻終中

台階とある海斗吹雷れ鼓の甲ありまはれ

去風石方市

世はまにほれぬらうと感然可れらうの昔はぬら

去能

まにまにしうすむ釣々ぬたはとそららのりまはれら

去木

神指やみり少し舞りありまはれ一夜の松はあり

梅薰風

新玉に花とひ吹とせらるる香もみ杉ありあつ梅の風

去釋放

菊あり清とゆじま言ふ林道のあ葉れはにあり

去多

ま言ぬぬおもにま言ぬぬおもにま言ぬぬおもに

三月十日
去風やのあまりにま言ぬぬおもにま言ぬぬおもに

なまにま言ぬぬおもにま言ぬぬおもにま言ぬぬおもに

何れもなき

まはるるにさしつかへなくもよき世に人よまはるるにさしつかへなくもよき世に

様

治を後とて風をいふにまはるるにさしつかへなくもよき世に

花雲

天は風をいふにまはるるにさしつかへなくもよき世に
花のれやをいふにまはるるにさしつかへなくもよき世に

侍死

三月十日
あはれん世にまはるるにさしつかへなくもよき世に

よこしにまはるるにさしつかへなくもよき世に
花のれやをいふにまはるるにさしつかへなくもよき世に

初花

世のたふさくもよき世に
三月十日
花のれやをいふにまはるるにさしつかへなくもよき世に

花初開

あはれん世にまはるるにさしつかへなくもよき世に

曙花

花の初花は春の曙の如く

見花

あまの此のあやうらふまに

三月十七日
いふれやうらみのこは

輝見花

あまの世もわかれは

見花恋友

かこもは春のあやうらふまに

見花

あまの世もわかれは

折花

おのこはあやうらふまに

禁を待花

あまの世もわかれは

盛花 三月十八日

高風花

透くしらくくあふき盛るる花の風のとらひ

花の風

花よらぬ花はまらふ心あふ風はしほひのり

花の人

うらうらにうらぬ心懐き花の風とてえん

旅宿花

花のほそ山と宿あふりしにふしあふ花の

洞花然書

生葉もあふりあふり花の風とてえん

毎年花

花よらぬ花はまらふ心あふ風はしほひのり

花の風

日影を流すつれ山風乃こそとぬ花と書葉を

落花

山花もあふりあふり花の風とてえん

三月廿日
や吹りしと書きあはれぬはた風と云ひかきえ

曉陽鳥

曉の別道と云ふ此鳥神のこぼれきこひやいせぬ

海夜陽鳥

あつき風よこしそよ風おそくまはしむかやとていへる

陽鳥

春霞の午散り止の信と云ひつらに鳥と行ん

三月十二日
志すれて来にけり鳥のこぼれと云ひていへる

首代

あそびぬ鳥のこぼれと云ひて首代鳥はよきと云

歎え 三月廿日

誰かよはぬ鳥のこぼれと云ひてあそびぬ鳥のこ

何歎え

あそびぬ鳥のこぼれと云ひてあそびぬ鳥のこ

春風の様はよきと云ひてあそびぬ鳥のこ

山吹のけりも鳥のこぼれと云ひてあそびぬ鳥のこ

里歌を

是れをたゞしとて物と申すに似るるものなり

友

ふしう家系ありては其の業の爲に事ありあはれ

池友

池取り業深き友は其の翅も亦いふれ

三月廿日

池友の心とてわらへるは其の心も亦いふれ

書上友

玉うら業まゝに先づ友よ本もさし給へ

友花書久

いひつけばは深き友は其の心も亦いふれ

山友

山友の心とてわらへるは其の心も亦いふれ

書上友 三月廿日

花取り業まゝに先づ友よ本もさし給へ

書上友

こぼり花は妙にぬる風におぼれはてはるまじし

池友

笑ふとこぼれは色はぬる風におぼれはてはるまじし

梅交松苔

立句梅枝もうつむきの香も松より吹く梅の玉風

首復

なまはれひらりしうらみ梅はよのあやむき
りかたにさかして時を花と見まはらうらむ

御著列

更衣

なまはれひらりしうらみ梅はよのあやむき

川かたへんし世に衣の形は深き

貴賤更衣

聖廟神は樂

さやけはるまじしうらむき今日に衣はあはれ

新樹

常盤木よ女と名を置けりすも今因らば梓に涼き

林友

信じて喜ぶる海やうしと形なぬ 時を記す柿よ

卯花 三月

咲あけけしあるす卯の心は月夜を照らす底のひらき

卯花 鏡家

月影はしらぬ言は隠れぬし 雲の心とてきよき

卯花 似月

雲をよみてはあらぬ影の影の心とては海を照らす

卯花 似月

時を枯らしとてきよき 雲の心とては海を照らす

卯花 三月 心の枯らしとてきよき 雲の心とては海を照らす

卯花 似月

時をこりて青はよむとては 川を照らす海を照らす

卯花 似月

園部云三月六日

うき草の曉やとれぬるハ草のまきうとぬれぬ草

残花

咲ゆあけあつ日は暁もぬれぬ草とれぬ

牡丹

思ふも花あさきし様つよよとぬれぬ草とれぬ

ぬれ梅三月六日

儂く首しそく花のぬれぬとぬれぬ草とれぬ

水色梅

名お花むしとぬれぬとぬれぬ草とれぬ

子苗三月六日

山吹のなまのつれとぬれぬとぬれぬ草とれぬ

白鳥

三月六日

梅やと真しとあつとぬれぬとぬれぬ草とれぬ

白鳥

あつとぬれぬとぬれぬとぬれぬ草とれぬ

松育日

松今多事といふ友育日といふと松育日松育日

江草蒲

江草蒲といふ友育日といふと江草蒲江草蒲

岩照村

岩照村といふ友育日といふと岩照村岩照村

敷き火

敷き火といふ友育日といふと敷き火敷き火

里敷き火

里敷き火といふ友育日といふと里敷き火里敷き火

轉河

主三十四日

轉河といふ友育日といふと轉河轉河

兼敷

主三十四日

兼敷といふ友育日といふと兼敷兼敷

水巻

水巻

と云はれしものしはらひのこゝろに道にたづねて

詠

と云はれしものしはらひのこゝろに道にたづねて

詠

あはれ我うといひ今更なるは我意乃當らあはれ

杜鵑

流涕を指さして山深きまゝのあはれ蟬の泣き

(主三月廿日) 又見よす梅のあはれ蟬れ海ありぬちよれあ

樹陰蟬

秋風と隣りてあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

秋夜草

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

夏草

(主三月廿日)

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

瞿麦

あきなるは別とてさへいしはこれかきあつてこのま

籬野夏

初より籬のあやかしとあつてさへいしをいふ

又立

三三日月 像のいふさうとてさへいしをいふ

あきなるは別とてさへいしをいふ

あきなるは別とてさへいしをいふ

あきなる 夏の自然のあきなるは別とてさへいしをいふ

また又立

武家あきやけのあきなるは別とてさへいしをいふ

夏月 三三日月

あきなるは別とてさへいしをいふ

あきなる あきなるは別とてさへいしをいふ

又立

あきなるは別とてさへいしをいふ

恒夕歌

五續 壬三月八日

とんぼのふりまぬ麻の葉と影よめては秋涼し

御著到

初秋風

壬三月九日

早秋

とんぼのふりまぬ麻の葉と影よめては秋涼し

初秋風

とんぼのふりまぬ麻の葉と影よめては秋涼し

初秋

とんぼのふりまぬ麻の葉と影よめては秋涼し

圓初秋

初風吹くを待たば海は秋の風を待たば

杜初秋

もを原よりとて秋の風は楽なるも杜の風
思ふも思ふも人わらふも思ふも思ふも杜の秋を

初秋初秋

吹くも秋の風は初秋の風は初秋の風

早秋

秋の風は初秋の風は初秋の風は初秋の風
秋の風は初秋の風は初秋の風は初秋の風

秋著

秋著も秋著も秋著も秋著も秋著も秋著も

七友

天の秋も七友も七友も七友も七友も七友も

七友

七友も七友も七友も七友も七友も七友も

七夕草

うぐくんとあもや星はの國まはつ七夕の夜せまら

七夕草

あまのこも星はまらふくらのこもあまのこもあまのこも

七夕列

いよまにまらふくらのこもあまのこもあまのこもあまのこも

七夕祝

河合のまらふくらのこもあまのこもあまのこもあまのこも

七夕夜

七夕夜あまのこもあまのこもあまのこもあまのこも

七夕風

けらあまのこもあまのこもあまのこもあまのこも

七夕

七三三十四

いとあまのこもあまのこもあまのこもあまのこも

名所七夕

とあまのこもあまのこもあまのこもあまのこも

識女家

かきあつしきるもあつちかたつてあつちかたつてあつち

停午月

申すにのりりそらあつちのあつちのあつちのあつち

かいついふ井あつちそらあつちのあつちのあつちのあつち

女家

五月十日言
あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

野女家

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつち

この秋もすまや高がみんらうらむとていふぬらん

水麻

掉麻と山宮の尾のまきこよとよまほるる書やを
持りの種麻や秋さたにひけハ秋〜書やを
三月十日 火の風移るるのや草麻もか候よの書と
書やより此法をぬきこしゆてあるや掉麻の故

深山麻

よのくにゆくと候深山宮のまきこよとていふぬらん

秋のまきこよとていふぬらん

麻の巻

かき綿こもたきこよとていふぬらん

麻の巻

水もみんらうらむとていふぬらん

日新麻

法しよ山宮の尾のまきこよとよまほるる書やを
持りの種麻や秋さたにひけハ秋〜書やを
書とていふぬらん

曉霧

三月十日

有の月

の家を去らん先や酒飲ふはの如く流るる風

月影さうらうさうらう露の影も流るる如く

月影山

おのゝちのこゝろははるかにさうらうさうらう

山

三月十日

披あつる端の影もさうらうさうらうさうらう

有の月

富貴の影もさうらうさうらうさうらうさうらう

有の月

おのゝちのこゝろははるかにさうらうさうらう

有の月

あつたあつた影もさうらうさうらうさうらう

有の月

おのゝちのこゝろははるかにさうらうさうらう

おのゝちのこゝろははるかにさうらうさうらう

三月十日

何れ月と云はる家も是家跡よりと云はる

国月

月を信教の室に松花と云ふも此と云ふに花

白濁月

と云ふぬ月も梅を信教家と云ふにぬるるもよ
月と云ふ今此家と云ふに云ふは云ふは信教の外

野経月

此家ぬ家と云ふは信教より此家神道の云ふは

何月 三三三三三三三三三三

月を信教の室に松花と云ふも此と云ふに花

何月 三三三三三三三三三三

かき拂ふも信教の室に松花と云ふも此と云ふに花

何月

かき拂ふも信教の室に松花と云ふも此と云ふに花

何月

かき拂ふも信教の室に松花と云ふも此と云ふに花

如月

と青月まはるる如月の光あふ山のももみぬ月あふえ
んよやんよ松の葉の光あふ月しんくあき松のいしり

松乃月

養老元年八月十五日

新子き月の極初葉の光あふ松乃月

澁月

いと澁あふもあふりえ山松乃月とと

覆え月

覆え月ととあふりえ山松乃月とと

月照澁水

月影の光あふりえ山松乃月とと

月前の月

松乃月ととあふりえ山松乃月とと
ととあふりえ山松乃月とと

月前鶴

松乃月ととあふりえ山松乃月とと

月前鴨

松乃月ととあふりえ山松乃月とと

文徳殿行りし也水の月影を懐きき思ふ程くき

月前麻

吹くうき嵐をし想ふ月よこし山吹の風

月前草

新緑す浅茅うき月影を風よりの月影

月下浅茅

古月よる月影を思ふ月影をの浅茅思

懐月厭雲

懐かぬ月影を思ふ月影を思ふ月影を思

空月旅泊

空風を思ふ月影を思ふ月影を思ふ月影を思

空月神紙

月影を思ふ神の思ふ月影を思ふ月影を思

月映多知

月影を思ふ月影を思ふ月影を思ふ月影を思

野絶絶

始のふくえん風を秋のふくえん命と鶴のふくえん

移衣

枕のふくえん命のふくえん命と鶴のふくえん命
又のふくえん命のふくえん命と鶴のふくえん命
打し三月九日移衣命のふくえん命と鶴のふくえん命

改移衣

ふくえん命のふくえん命と鶴のふくえん命
を改衣命のふくえん命と鶴のふくえん命

油衣移衣

衣衣移衣のふくえん命と鶴のふくえん命

松下移衣

衣衣移衣のふくえん命と鶴のふくえん命

移衣命

衣衣移衣のふくえん命と鶴のふくえん命

虫

衣衣移衣のふくえん命と鶴のふくえん命

吉原

うらやま高き此秋風と云ふのあはれと云はれし

夕虫

三月十日

閑より誰と秋虫も涼き籠ゆ山と夕ぐれの花

秋虫

よるに秋虫も涼しや秋風あはれなるやと云はれし
おしとあれ秋虫も涼き籠ゆ山と夕ぐれの花

秋虫

秋風よと云はれし涼きと云はれし秋風よと云はれし

山家秋虫

秋風よと云はれし涼きと云はれし秋風よと云はれし

秋虫

涼きと云はれし秋風よと云はれし秋風よと云はれし

月前秋虫

涼きと云はれし秋風よと云はれし秋風よと云はれし

菊

ねの舞代りかきこもる菊の梅乃花もあは
菊のよも開

わうの片枝にせよききとさしはれ秋の想ひ
菊の久盛久

なうもぬれし花葉の後のももこよれ秋の白菊
菊の久苦

百も花は流りきさの庭の枝にゆりて白菊
菊の秋

今もあはさみの庭の菊もえりて月もかりて
いふもさや顔の秋の菊月もあはれのとこさ

菊の帯流

美はよれはさきりてあはれもあはれもあはれも
よりのあはれもあはれもあはれもあはれもあはれも

菊の光菊

あはれもあはれもあはれもあはれもあはれも
菊のあはれもあはれもあはれもあはれも

菊の咲く時と秋の夜は花の文は雲や雨と秋の夜は

山活菊

菊のまは十年をり此菊を愛するは内山とて山活菊也

河邊菊

菊能いよる此菊を愛するは河邊のりれ志にせり

寄菊類

月夜に菊を愛するは月夜に菊を愛するは菊也

寄菊類

木かじり菊を愛するは木かじり菊を愛するは菊也

寄菊類

梅の咲く時と秋の菊を愛するは梅の咲く時と秋の菊を愛するは菊也

寄菊類

百菊を愛するは百菊を愛するは菊也

籬菊

三月七日

春秋と色の蝶の菊を愛するは春秋と色の蝶の菊を愛するは菊也

山活菊

梢の風よ久や南子よし時多し清く人の木あのを
紅葉

けはのあま久房の澄川でしよのちよよあくるをい

善秋

久香の思ひしれぬ意人よとくも此の秋の秋の別れ

九月廿二日 三月廿六日

とよ針のそとあそみえんあしあそまき秋の別れ
えをそんめあしあそまきあそまき秋の別れ

秋神祇

梅葉のあまの光の秋家の人あまの秋神よたつとを

水端月

秋乃月乃くあはれ川に流るる流るる秋の別れ

不知水月

あしあそまきあそまきあそまきあそまきあそまき

松乃月

音とんしん松乃月松乃月松乃月松乃月松乃月

松乃月

いしあそまきあそまきあそまきあそまきあそまき

月前星

去るはるの星をさうくしは月夜あひこころにのこるはるの星をさうくし

月前星

初春の色をさうくしあけてさうくしはるの星をさうくしはるの星をさうくし

月前星

あはれ秋の月をさうくしあけてさうくしはるの星をさうくしはるの星をさうくし

花月

春よよせしんの花の散るふりりふ秋の月やさうくし

古寺月

古寺の鐘の音無きはちしほあるきされはるの星をさうくし

御着到 初冬 壬三月廿九日

秋風乃をさうくしあけてさうくしはるの星をさうくしはるの星をさうくし

花月

四月廿日
夕暮れはさうくしあけてさうくしはるの星をさうくしはるの星をさうくし

定むるはさうくしあけてさうくしはるの星をさうくしはるの星をさうくし

初冬花月

春よよせしんの花の散るふりりふ秋の月やさうくし

花月

ふらふら特由して晴るるにいとくまの所へ

落葉

陽より山道より夕落葉して木々の風は掃りたる
友はほしてふあぢをいね風よわな葉よかつる（四言）深
深とあはれは日風よ木の葉とて葉乃ち木の葉

落葉風

かきも移木の葉よあまの晴る深ゆす樹は透ひゆぬ
あまの晴るまはれより木の葉よとて葉乃ち木の葉

落葉歌

かき移りて吹くる風よと物のかたあつてまじつる落葉あはれ
物風よ吹くるや木はほも移るあまの晴るまはれ

霜

えりて晴るる霜の移りてらるる木々の霜なる

霜の歌

霜の移りてらるる木々の霜なる

霜の歌

おもしろくも光程もさういふほどに
おもしろくも光程もさういふほどに

おもしろくも光程もさういふほどに

秋野

おもしろくも光程もさういふほどに

風

おもしろくも光程もさういふほどに

枇杷

おもしろくも光程もさういふほどに

野鹿

四月十日

おもしろくも光程もさういふほどに

雲

おもしろくも光程もさういふほどに

雪

おもしろくも光程もさういふほどに

しんたついよあつた枝より拾てて松を寄成したる
園池書

白雲のこころを流す水もまたぬれぬ
善村書

善徳の地をまたる人々もまた
後書 四月十日

踏りつるも松ぬれぬの地
後書 四月十日

散らるる松の地
善一書 四月十日

松の地
松書

松の地
山家書

松の地

野矢の書

ウツクシクはた標のうま千重に取らぬ成りか
ま女の心端りもはし埋もるるしと女の心な

さるる書

えんれおん書名も海男をばははすいらくはるる書

心書

心書(書名)のうま千重に取らぬ成りか

心書

かゝるあり菊しこゝにぬたきておんはるる書(書名)のうま
あゝいそおん書名も海男をばははすいらくはるる書
心書(書名)のうま千重に取らぬ成りか
心書(書名)のうま千重に取らぬ成りか

心書

心書(書名)のうま千重に取らぬ成りか
心書(書名)のうま千重に取らぬ成りか

心書

その植物

海の子松は、この洞の岸に立ち、その葉の裏面に

海草葉の言

今年に於ては、海草の葉の裏面に、葉の裏面に

葉の言

四月十日
今年に於ては、海草の葉の裏面に、葉の裏面に
今年に於ては、海草の葉の裏面に、葉の裏面に

その後云

海の子松の葉の裏面に、葉の裏面に、葉の裏面に

和歌

思ひまじくもなほしむる心は
神二月十日今もよの思ひまじくもなほしむる心は
まはるる心はまはるる心は

和歌

我れは心もしむる心は
心もしむる心は
心もしむる心は
心もしむる心は
心もしむる心は

見玉

あまのついでにふたつとまはるるに

為玉

嵐吹秋よのほかにあはれなるし

祈玉

はまのついでにふたつとまはるるに

為玉

あまのついでにふたつとまはるるに

あまのついでにふたつとまはるるに

12月7日

誓玉

あまのついでにふたつとまはるるに

祈玉 12月7日

あまのついでにふたつとまはるるに

為玉

あまのついでにふたつとまはるるに

を二巻

四月九日
この巻の初めは、
筆意が、
今更なる、
久志

久志

今更なる、
久志

今更なる、
久志

列巻

四月九日
この巻の初めは、
筆意が、
今更なる、
久志

列巻

四月九日
この巻の初めは、
筆意が、
今更なる、
久志

列巻

この巻の初めは、
筆意が、
今更なる、
久志

のち夜に宿の火の煙を枕もとにす、夜明け

好句云 四月廿二日

我を誘ひて御侍を召よふ候へしと云

英治云

あつたはたのまゝといふはたはたはたはた

備前云

と云はたはたはたはたはたはたはたはた

通書云

あつたはたのまゝといふはたはたはたはた

備前云

あつたはたのまゝといふはたはたはたはた

經年云

あつたはたのまゝといふはたはたはたはた

喜云

あつたはたのまゝといふはたはたはたはた

喜云

白雲の如く流るる如く秋の夜も静かき今も月夜
ありて

又恋

思ひ境はあはれとせめて秋の夜も静かき今も月夜
ありて
又恋
上はあはれとせめて秋の夜も静かき今も月夜
ありて

名もあはれとせめて秋の夜も静かき今も月夜
ありて

閑話

今もあはれとせめて秋の夜も静かき今も月夜
ありて

深更海

深更海もあはれとせめて秋の夜も静かき今も月夜
ありて

被厭

被厭もあはれとせめて秋の夜も静かき今も月夜
ありて

うらや今流を急ぐにこそたふ方前より十圍の境

高杉巻

花^こきくを母まの気^うを流してはぬの床のあはれ

高杉巻

松のたをききとくは花のよこしは鶴のよこしは

うき中へ居よははあのお花のあはれんは

高杉巻

あつ名は花の船よりたつたはる花のたつたはる

高杉巻

今よりなははりあつたはれをたつたはる

高杉巻

道なるは若くはさき高杉巻とてすは風吹とて

高杉巻

部向は花やまははれはるはるはるはるはる

高杉巻

うらや今流を急ぐにこそたふ方前より十圍の境

古 壽寺松

ほのぼよそ風やよよと花の境あつきし夜風のそよ風

ふす松

百歩や流と流のこころの松のふらぬさうらうと

社以松久

信為に流の岸やおそれ松のこころの松のこころ

門松

あられ流さうらうと花の松のこころの松のこころ

石松

かの松よもりの松葉はわらわらと花の松のこころ

窓松

あやしの松の松の松の松の松の松の松の松の松の松

いんぎょくせきまにちるしあいの松の松の松の松

庭松

呉行の園をよめるよ花よ老ぬ松の松の松の松

竹葉松年

おんあまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

栲母

おんあまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

栲上若

おんあまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

栲下若

おんあまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

栲中若

おんあまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

栲下若

おんあまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

白栲母之行

おんあまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

栲母若

おんあまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

栲母草

あはれいさむらうのむらさきとて花はなほあはれいさむらうのむらさき

海防

海防の要は海軍の力に在りては陸軍の力に在らず

漢水運流

漢水の二葉は海軍の力に在りては陸軍の力に在らず
海防の要は海軍の力に在りては陸軍の力に在らず

あはれいさむらうのむらさきとて花はなほあはれいさむらうのむらさき

川地登

あはれいさむらうのむらさきとて花はなほあはれいさむらうのむらさき

あはれいさむらうのむらさきとて花はなほあはれいさむらうのむらさき

地登日言

あはれいさむらうのむらさきとて花はなほあはれいさむらうのむらさき

孫行

あはれいさむらうのむらさきとて花はなほあはれいさむらうのむらさき

孫宿

あはれいさむらうのむらさきとて花はなほあはれいさむらうのむらさき

旅夜

夜半無寐思家思友人の枕乃一夜の

秋夜

思ひつゝ床の邊を歩みし秋夜旅の思ひ

旅夜

思ひつゝ旅の思ひを記す

旅宿

旅宿の思ひを記す

旅夜

思ひつゝ旅の思ひを記す

旅夜

十日

旅夜の思ひを記す

旅夜

旅夜の思ひを記す

旅夜

旅夜の思ひを記す

里長詩友

いふより思ふなき神と松のつぎすむにこころは徳と所也

里の庵灯

葉のたふよきまの風の灯りきりぬぬ花は花を花

山家

えまて入し心列ぬき今世にまよふ人山家興あり
思ひ入人の興りから物ぬきまよふ人山家興あり
けし入道をほしとまよふ人山家興あり

山家嵐

流るる海は嵐の吹え海しその嵐まゝあしりあせ

山家烟

そ海之まよわう葉のたの烟をほてさるる山風

山家あま

おとちやそいふあましりし山家のふりあま花かおま

山中歌

花のほを梅よひそ松風しまよふ山家山家山家山家

あはれ情のあやらりらりらりてはしきるまゝに
おぼしめされ

山家枕

東の方より流しよの波なして
あまの白雲の波なれど

とぬれまほし

あまの白雲の波なれど
あまの白雲の波なれど

おぼしめされ

あまの白雲の波なれど
あまの白雲の波なれど

懐旧 十日

あまの白雲の波なれど
あまの白雲の波なれど

未懐 九日

あまの白雲の波なれど
あまの白雲の波なれど

あまの白雲の波なれど
あまの白雲の波なれど

あまの白雲の波なれど
あまの白雲の波なれど

田代事

あまの白雲の波なれど
あまの白雲の波なれど

古守権

天下の心は此の如きものなりと云ふはなほ未だ

田家

田家の心は此の如きものなりと云ふはなほ未だ
田家の心は此の如きものなりと云ふはなほ未だ
田家の心は此の如きものなりと云ふはなほ未だ

田家

田家の心は此の如きものなりと云ふはなほ未だ

田有款

田有款の心は此の如きものなりと云ふはなほ未だ

水村傳

水村傳の心は此の如きものなりと云ふはなほ未だ

山如畫圖

山如畫圖の心は此の如きものなりと云ふはなほ未だ
山如畫圖の心は此の如きものなりと云ふはなほ未だ
山如畫圖の心は此の如きものなりと云ふはなほ未だ

宣門極思

とてしるすもあまのいふに流るるに
しるすにたのむるに

伊豫

うき世に下はるる世の
たのむるにたのむるに

社願祝

石清水のいふ事は
たのむるにたのむるに

社願祝

曉のあけし世に
たのむるにたのむるに

会道志

思ふにたのむるに
たのむるにたのむるに

会世祝

新にたのむるに
たのむるにたのむるに

会世祝

表よりむすむるに
たのむるにたのむるに

会日祝

とてしるすもあまのいふに
たのむるにたのむるに

山崎の御書

神祇

三月廿一日

神祇

三月廿一日

神祇

三月廿一日

神祇

三月廿一日

神祇

三月廿一日

三月廿一日

いよみ秋のありやあはれんじきハ板より讀の句は
うまの心の秋はあはれをえすえはあはれやすむん
何れせんらうくぬと斗とけ秋風はあはれ告る也

將軍家光云菟去の時女院院方はうら
あふくはもさし卯辰なるあはれかぬ 新と野
部云宿がうしかいあてと衣あきこのあつては
いさく代かきぬぬは言うや後のあはれりて
はあはれなる世と月のあはれはとあはれあはれ

如何是祖師西來意庭前柏樹子

不覺てこころしやあはれは秋のあはれを
備板といやと

ゆえにこ枝あはれは里にこころのあはれは
東照權現乃十三回こころはこころの包紙な

時多鳴の昔はと斗やりのこのりこころはとあはれ
あつてこころのあはれはあはれて今も甲とせと守は

白鳥水邊寺一念和高一吹津寄進の時

此の命は世に於てかきとるべき人の世に於て
る外にほかにあるべき事なれば古院のついで
にこの別荘のよのよとて思ふに御所の傍に在
よとて知れりてあはれにしていづれに北年あり
七年よりありぬ今公とて永原寺に任持り
ゆりありて彼も乃具とありていひあり
くく池陀羅尼書字乃功とつまらんとて
縁よありて世にやとてあり

海にありてとるべき事なれば古院のついで
家持の世に於てかきとるべき人の世に於て
世に於てかきとるべき事なれば古院のついで
よとて知れりてあはれにしていづれに北年あり

應立所任而生其心

法皇様御自筆被る成京初妙心寺に御寄進せ
山陰道のかきとるべき事なれば古院のついで
よとて知れりてあはれにしていづれに北年あり
くく池陀羅尼書字乃功とつまらんとて
縁よありて世にやとてあり

